

日本鉄鋼協会記事

編集委員会

第4回和文会誌分科会 開催日：6月6日。出席者：田中主査，ほか28名。

1. 19件の論文審査報告がなされ，掲載決定18件，その他1件であった。

2. 「鉄と鋼」第66年第12号（10月号）に論文11件，技術報告1件，特別講演1件，委員会報告1件掲載決定した。

第4回欧文会誌分科会 開催日：6月9日。出席者：中村主査，ほか6名。

1. 8件の論文について審査報告がなされ，掲載可1件，照会后掲載可6件，修正依頼1件であった。

共同研究会

総務幹事会

第1回幹事会 開催日：5月19日。出席者：伊木幹事長，ほか26名。

1. 昭和54年度共同研究会決算報告

2. 昭和54年度共同研究会活動報告

3. 共同研究会資料のマイクロ化

各分会分科会より提出される資料に関して，鉄鋼技術情報センターにて一元管理を行い，会員会社への検索・閲覧・複写の便宜をはかる「マイクロ化」の主旨・実施方法の説明がなされた。

4. その他

(1) 講演謝礼について

(2) 懇親会費について

(3) 「圧延に関する国際会議」の進捗状況

コークス部会

第20回部会 開催日：6月5日～6日。出席者：研野部会長，ほか160名。

住金，住金化工・和歌山にて開催した。

1. 共通議題Ⅰ「石炭コークスの品質管理の現状と問題点並びに将来の展望」9件，共Ⅱ「コークス炉燃焼管理の現状と将来の展望」5件，共Ⅲ「Cガス精製設備のメンテナンスと問題点について」3件，自由議題4件，新設報告1件の報告があった。又特別講演「原料炭の基礎物性部会中間報告について」が前記部会部会長，木村英雄氏より行われた。

製鉄部会

第56回部会 開催日：5月21日～23日。出席者：鈴木部会長，ほか148名。

新日鉄・君津にて開催した。

1. 共通議題として「エネルギー情勢の変化に伴う製鉄部門の諸問題」として，省エネルギー，オールコークス操業，重油吹き込み及び代替燃料について，討論を行った。

自由議題として8件，改修報告2件の報告があった。

特別講演として，中山製鋼より「製鉄設備の高稼働率操業について」，又神鋼より「カタル製鉄所の建設と操業について」計2件の講演があった。

鋼管部会

第34回部会 開催日：6月5日～6日。出席者：田中部会長，ほか延べ276名。

開催地：第1日 住金・尼崎

第2日 住金大径・堺

1. 共通議題

「今後5ヶ年の製管技術の展望」について，アンケートのまとめ発表と質疑応答が行われた。

2. 溶接鋼管分科会報告

分科会の活動状況報告と，「寒冷地向大径ラインパイプ実管の不安定延性引裂き試験」の報告が行われた。

3. 自由議題

次の3件の発表が行われた。

(1) 「ステンレス溶接管の製造について」

(2) 「鍛接管の省エネルギー対策について」

(3) 「鋼管の機械的性質を素材フローストレスから推定する方法について」

4. 特別議題

「川鉄・知多 26" ERW 設備概要」と題し発表が行われた。

鋼板部会

第32回ホットストリップ分科会 開催日：6月12日～13日。出席者：谷主査，ほか85名。

開催地：新日鉄・八幡

1. 議題

(1) 共通議題「操業成績報告」

(2) 〃 歩留り（圧延及び精整歩留り）

(3) 自由議題「歩留りに関する改善対策」（7件）

(4) 工場見学 新日鉄・八幡・二熱延工場

第31回コールドストリップ分科会 開催日：6月5日～6日。出席者：今井主査，ほか140名。

開催地：日本鋼管・本社及び京浜

1. 議題

(1) 操業状況調査表まとめ報告

(2) 自由議題「冷延工場全般の要員調査と省力について」

第1分科会：「酸洗～電清」9件

第2分科会：「焼鈍～精整」11件

全 般：「酸洗～精整」6件

(3) 工場見学 日本鋼管・京浜・冷延工場

条鋼部会

第31回大形分科会 開催日：5月22日～23日。出席者：吉岡主査，ほか91名。

開催地：トピー工業・豊橋

1. 工場操業状況報告
2. 精整合理化
3. 自由議題

(1) コンビネーションミルによる大形丸鋼の圧延について

(2) 圧延基礎量のオンライン計測

4. 特別講演

「キャリバーロールの光弾性による応力解析」

5. 工場見学 トピー工業・豊橋

第48回中小形分科会 開催日：6月5日～6日、出席者：森脇主査，ほか 103 名。

開催地：吾郷製鋼所・千葉

1. 工場操業状況報告

2. テーマ研究A

「省エネルギー対策について」

テーマ研究B

「製品の結束及び表示」

3. 自由研究

4. 特別講演

「中小形圧延設備の新設並びに改造の考え方」

5. 工場見学 吾郷製鋼所・千葉

第49回線材分科会 開催日：5月28日～29日、出席者：水内部会長，西崎主査，ほか 103 名。

開催地：神鋼・加古川

1. テーマ研究I「工場操業状況」

2. テーマ研究II「省エネルギーの現状と今後の進め方」

3. 自由テーマ

超硬ロール，ホットチャージ，加熱炉等 10 件の発表，討論が行われた。

4. 工場見学 神鋼・加古川

鉄 鋼 分 析 部 会

第46回部会 開催日：6月4日、出席者：川村部会長，ほか 41 名。

場所：神田学士会館

1. 5 分科会，2 小委員会の経過報告

2. 幹事会報告

3. 鉄鋼標準試料委員会報告

4. ISO/TC17, TC102 報告

5. その他

第37回蛍光X線分析分科会 開催日：6月3日、出席者：安田主査，ほか 39 名。

場所：神田学士会館

1. JIS 案文（鉄鉱石の蛍光X線分析方法）の審議

2. 粉末ブリケット法による鉄鉱石分析の共同実験について

3. 標準試料使用に関するアンケート結果について

4. 新標準試料の評価試験について

第60回化学分析分科会 開催日：6月3日、出席者：岸高主査，ほか 41 名。

場所：神田学士会館

1. 標準分析法による微量元素定量法

- (1) 第1回共同実験結果のまとめ

- (2) 第2回共同実験結果報告

- (3) Al, As, Sn 等の自発研究報告

2. JIS 鉄鋼化学分析法の審議経過報告

耐 火 物 部 会

第27回部会 開催日：6月12日～13日、出席者：飯田部会長，ほか 65 名。

開催地：住金・鹿島

今回は高炉炉前材料を統一テーマとしてとり上げた。

1. 統一テーマ

「高炉炉前材料」 発表 11 件

2. 自由テーマ

高炉の解体調査等 発表 4 件

3. 工場見学

・品川白煉瓦・鹿島

・住金・鹿島

品 質 管 理 部 会

第42回部会 開催日：6月12日～13日、出席者：西澤部会長，ほか 87 名。

日新・呉にて開催された。

1. 共通議題は「半製品、仕切品の品質管理」であり，8 件の報告があり，活発な討論が行われた。又自由議題として自I「重要品の品質管理」自II「省エネルギー操業下の品質管理，品質保証について」をとりあげ9件の報告があった。

設 備 技 術 部 会

第22回圧延設備分科会 開催日：6月12日～13日、出席者：徳光部会長，鈴木主査，ほか 133 名。

開催地：新日鉄・室蘭

1. 共通テーマ

油圧サーボ装置の問題点と対策

—油圧圧下とロールペンディング—

2. 自由テーマ

(1) タンデムミル変速機の補修について

(2) 熱延仕上設備の改善

(3) 連続加熱炉の均熱帯改造による省エネルギー対策

(4) 棒鋼レッヘンタイプ冷却床の補修について

3. レクチャー

(1) 破壊力学の設計への応用

(2) 高生産量小形条鋼・棒鋼圧延設備

材 料 研 究 委 員 会

第39回委員会 開催日：5月30日、出席者：大橋委員長，ほか 10 名。

今回より新たなテーマについて活動を行う。その運営方法が討議された。

1. 研究テーマ

各社アンケート結果をもとに，「破壊靱性」を研究テーマに決定した。特に破壊靱性を支配する冶金因子の追求を目的とする。

2. 研究期間

一応5年間を目安とする。最初の2年間は自由な研究

発表・討論を行い、その間に委員会として共通に行えるテーマ内容を絞っていく。最終の1年は「とりまとめ」とする。

3. 研究方法

研究対象は母材に限らず溶接部も含める広範囲のものとする。

ISO/TC17 事務局運営委員会

第3回専門諮問部会 開催日：5月29日。出席者：青木部会長、ほか13名。

下記事項について報告、質疑応答が行われた。

1. 次回EC会議開催について

(a) TC17/SC, WG の問題点摘出依頼

(b) TC17/SC の再編成

新たに発足したワーキンググループで検討していくことに決定された。

(c) その他、構成メンバー、議題(案)について

2. TC17 事務局近況報告

3. TC17/SC 1 幹事国業務に対する援助

4. 専門諮問部会の今後の運営方針について

鉄鋼基礎共同研究会

高温変形部会

第15回部会 開催日：5月29日。出席者：田村部会長、ほか27名。

1. 講演

(1) Al-Mg 合金における高温脆化

(2) 炭素鋼の熱間加工性

(3) 鋼の γ - α 変態域における脆化挙動

(4) 連铸々片の熱間加工性評価

2. 協議事項

昭和55年度シンポジウムは「高温変形と高温破壊」をテーマにとりあげ、「変形機構」「変形抵抗」「高温延性と破壊」の3部門より構成する。

ラッセル・アインシュタイン宣言 25 周年に際して (声明)

今を去る、四半世紀前の1955年7月9日、バートランド・ラッセルとアルベルト・アインシュタインの両碩学の連名で呼びかけられた宣言が湯川秀樹博士等を含むノーベル賞受賞者の連署の下に全世界に向けて発表された。

宣言は、核兵器の発達とその使用のおそれが人類絶滅の脅威を現実にも生み出していることを直視し、警告している。そして、世界の科学者が思想、信条、国籍、社会体制等の別を超えて一堂に会して、その危機の克服の方向を討議し世界各国政府に対して世界戦争による国家目的の達成の不可能なことを自覚するよう、またあらゆる紛争を平和的に解決するよう勧告する決議を採択し、広汎な署名運動を起すことを呼びかけている。

宣言は「その存続が疑問視されている人類、ヒトという種の一員」の立場に立ち、かつ核戦争の恐るべき危険を最もよく知悉している科学者こそ核兵器廃絶のために誰よりも積極的に努力すべきであるとして科学者の社会的責任を強調している。この宣言を契機として1957年パグウォッシュ会議が開催され、湯川、朝永両博士を含む広汎な世界の科学者がはじめて一堂に会し討議した結果、ラッセル・アインシュタイン宣言の精神に沿う声明を採択した。

以来四半世紀の間、科学者を含む世界諸国民の世論や運動を背景として、幸い核兵器は使用されなかった。しかし、これまで核兵器保有の根拠とされてきた核抑止論も、その後の核兵器システムの発達により、その正当性が疑わしくなり、核兵器が実際に使用される危険性が増大してきている。

核兵器の蓄積により「人類は前例のない自滅の脅威に直面」していることは、2年前国連軍縮問題特別総会が一致して採択した最終文書にも明記されている。

現下の緊迫した情勢は、「あらゆる紛争問題の解決のための平和的手段を見出すよう」各国政府に勧告した宣言の趣旨がいよいよ現実的なものとなりつつあることを示している。

日本学術会議は、創立にあたって、これまで日本の科学者がとりきった態度について強く反省するとともに科学を文化国家、世界平和の礎たらしめようとする固い決意を内外に表明した。それ以来、とくに1954年のビキニ水爆実験以後、核兵器の廃絶については常に重大な関心を抱き、核兵器の実験、製造、貯蔵、使用に反対するため多くの勧告、声明、アピール等を行ってきた。本会議がラッセル・アインシュタイン宣言の趣旨に賛同し、パグウォッシュ会議声明を全面的に支持する決議を行ったのは当然である。

本年、ラッセル・アインシュタイン宣言25周年を迎えるに際し、本会議は従来一貫してとってきた立場を想起しつつ、改めて同宣言の精神と意義とを再確認し、今日なお実現していない核兵器廃絶という全人類の悲願を達成するため、科学者としての社会的責任を果たすべく一層の努力を傾ける決意である。

ここに内外の科学者、学術団体等が本会議のこの声明を支持し、協力されるよう強く訴えるものである。